

生物多様性ふくおか戦略（仮称）

素案

[概要版]

平成 24 年 3 月

福 岡 市

1 生物多様性とは

生物の多様性に関する条約（以下「生物多様性条約」という。）では、生態系の多様性・種の多様性・遺伝子の多様性の3つのレベルの多様性があり、これらの相互のさまざまなつながりも含めて生物多様性としています。

生物多様性について考えるということは、生きものたちの豊かな個性とつながりを考えることです。福岡市には固有の自然があり、それぞれに特有の生きものがあること、そして、それぞれがつながっていることとも言い換えられます。

2 生物多様性をめぐる危機

地球規模の課題

人間は種の絶滅速度をここ数百年で1,000倍に加速させ、人間が根本的に地球上の生物多様性を変えつつある。

多くの種の絶滅や生態系の崩壊を招いている。
（熱帯雨林の急激な減少、種の絶滅の加速、生物資源の消失）

気候変動による世界的な危機

全球平均気温上昇 1.2～2.5

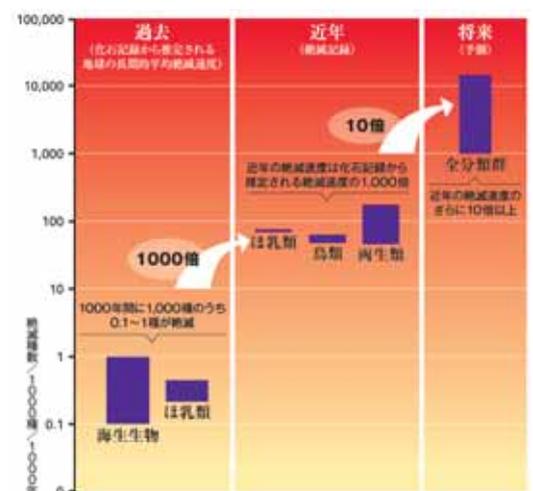
動植物の20～30%が絶滅のリスク

日本規模の危機・課題

第1の危機：開発や乱獲による種の減少・絶滅、生息・生育地の減少

第2の危機：里地里山などの手入れ不足による自然の質の低下

第3の危機：外来種などの持ち込みによる生態系のかく乱



生物の絶滅のスピード
ミレニアム生態系評価より

3 生物多様性をめぐる国内外の動向

生物の多様性に関する条約（生物多様性条約）（平成4年）採択

生物多様性基本法（平成20年）制定

生物多様性国家戦略 2010（平成22年）閣議決定

生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）開催（平成22年）

4 生物多様性の役割

福岡市の暮らしを支える生物多様性

生きものがうみだす大気と水

暮らしの基礎

生きものと文化の多様性

自然に守られる私たちの暮らし

福岡市の個性・魅力を支える生物多様性

「アジア有数のグルメシティ」を支える食文化

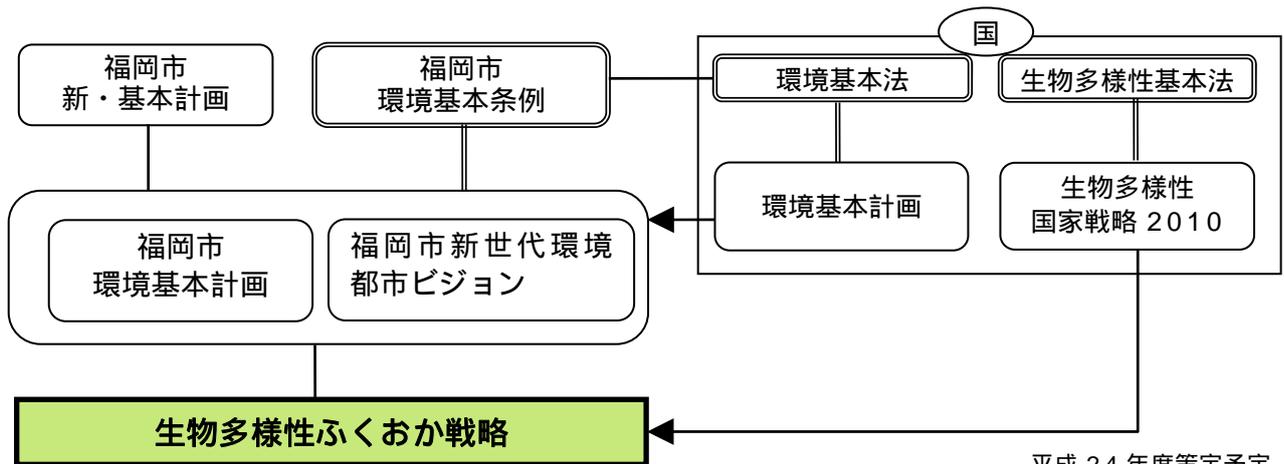
「活気溢れる祭りや歴史が息づく観光のまち」を支える美しい名所

「豊かな自然環境と美しい都市デザイン」を支える都市を取り囲む豊かな自然

「新たな活力を創造する拠点の形成」にみられる環境と共生する未来都市や学術研究都市

5 戦略の位置づけ

本戦略は、「生物多様性基本法」第 13 条に定められた生物多様性地域戦略であり、「生物多様性国家戦略 2010」を踏まえて策定するものです。



6 戦略の期間

本戦略の期間は 100 年間とし、長期目標の 100 年後を見据えつつ、当面 10 年程度の取り組みをとりまとめます。

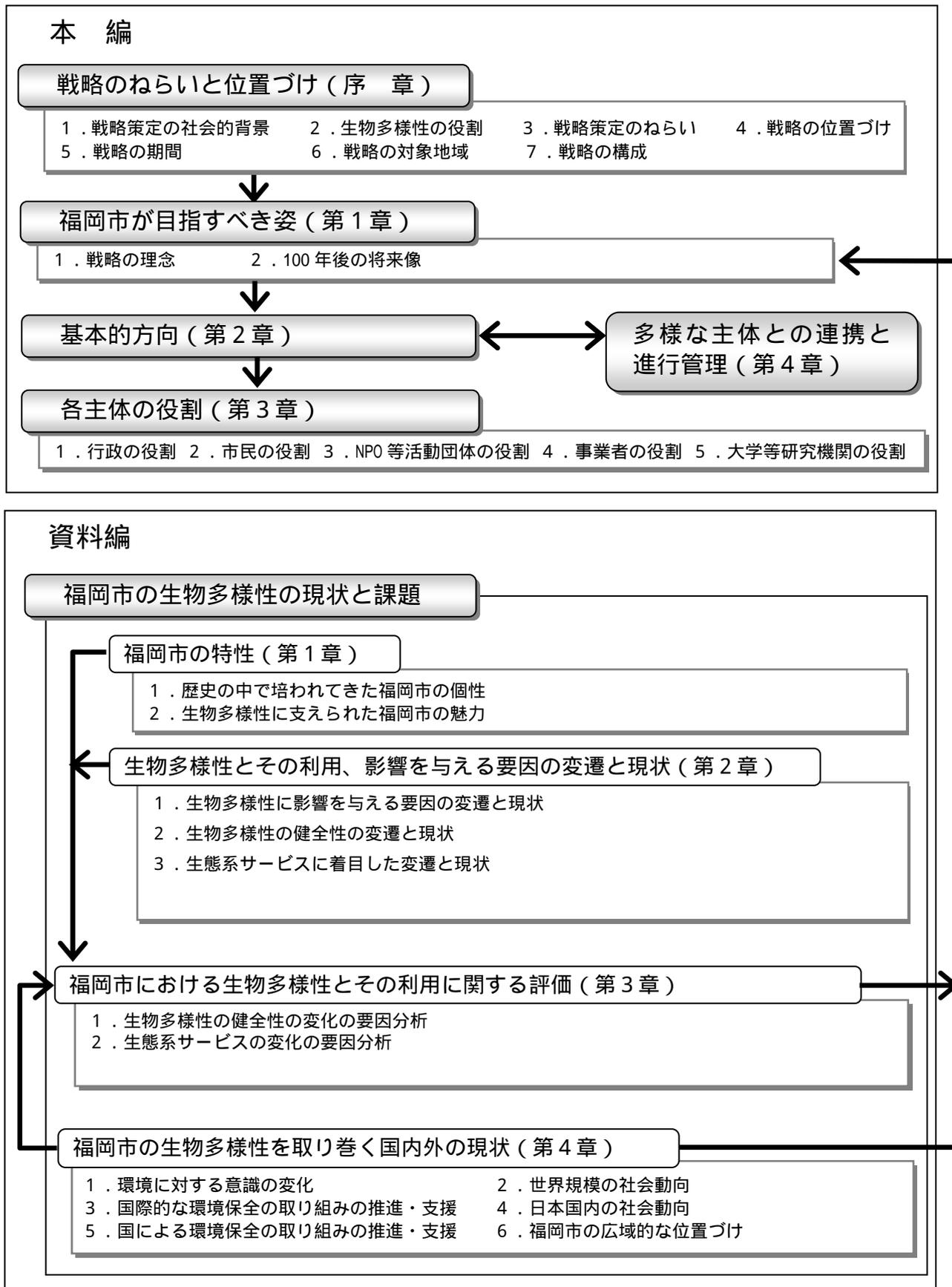
なお、自然環境や社会情勢の変化に対応するために、10 年程度を目処として、見直しを行う予定とします。

7 戦略の対象地域

本戦略の対象地域は、福岡市新・基本計画の対象とする福岡市全域とします。

8 戦略の構成

本戦略の基本的な構成は、以下のとおりです。



1 戦略の理念

「生物多様性国家戦略2010」の「生物多様性の保全及び持続可能な利用の理念」を本戦略の理念として位置づけるものとします。

すべての生命が存立する基盤を整える
人間にとって有用な価値を持つ
豊かな文化の根源となる
将来にわたる暮らしの安全性を保障する

2 100年後の将来像

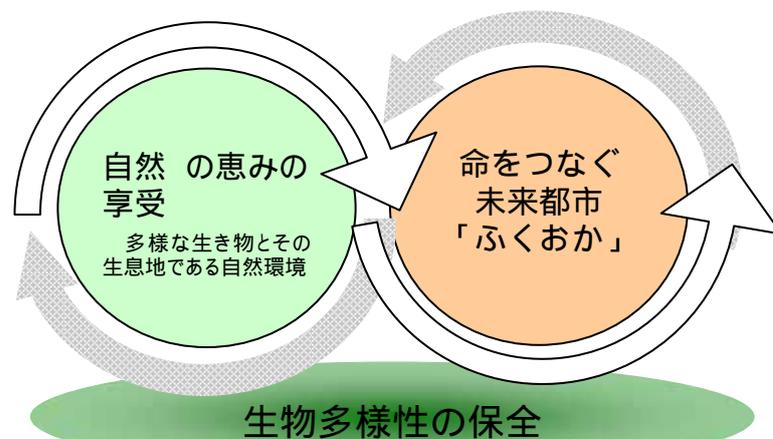
(1) 全体目標

遙かにつながる玄界灘、筑紫野を流れるいく筋もの清流、立花山の山懐、仰ぎみる脊振の峰。

過去二千年にわたってそこに人々が生きてきた足跡を残すまち。

人々は自然と共生し、生物多様性の恩恵に支えられ、まちは発展をとげてきました。

市民が多様な生き物とその生息地である自然環境の
保全・再生・育成に取り組み、
百年後も豊かな自然と共生し、その恵みに支えられ、
命をつなぐ未来都市「ふくおか」



(2) 地域別目標

福岡市の生物多様性は、地形・地質などの自然的な基盤と、その上に積み重ねられてきた人々の営みによって形づくられてきました。

そうした生物多様性の観点から市域を8つに区分し、目標とする姿を示します。

地域特性区分	目標とする姿（一部抜粋）
1.海洋域	海洋汚染や温暖化が最小に抑えられ、豊かな水産資源の恩恵で食文化が継承される
2.島しょ部	岩礁や砂浜が残り、貴重な生きものや固有の文化が保全される
3.沿海部(自然的地域)	干潟や藻場などの沿岸生態系が保全され、多様な海洋生物が生息する環境が形成される
4.沿海部 (中心市街地・港湾地域)	市街地や港湾地域の低未利用地に緑地が造成される
5.内陸部(市街住宅地域)	丘陵、崖線、河川沿いに帯状に緑地が連なり風の通り道が形成される
6.内陸部 (里地里山・田園地域)	多くの二次林が自然遷移に委ねられ、里地里山の重要性を理解され、保全される
7.内陸部(山地・丘陵地域)	近郊の森林は、市民が気軽に楽しみ、生物多様性を学ぶ場となる
8.河川部	多自然型川づくり等で、陸域から水域で生物の生息環境が変化するエコトーン(移行帯)が再生されている



1 戦略の基本的方向

本戦略の第一フェーズとなる当初の10年間は、身近な自然や食文化など本市の個性・魅力が生物多様性に支えられていることの認識を促し、生物多様性の重要性を広く福岡でも『社会への浸透』をさせることを初期段階の目標とします。

その上で、本市の自然的特徴である油山・脊振山などの山々から、福岡平野を貫き、博多湾へと流れる多々良川・那珂川・室見川などの河川にいたるさまざまな自然環境のつながりを意識し、生物多様性の『保全』及び『持続可能な利用』を基本的方向の柱として、生物多様性に支えられた特徴的な『文化』に更なる磨きをかけ、生物多様性における弱みを多様な主体や地域との『連携』によって補っていきます。

2 施策の基本的方向

施策の基本的方向の中では、本市の将来の生物多様性のあり方を示し、保全と持続可能な利用について、各計画や事業に反映し、市全体で一体的に連携して取り組むための道筋をつけることをねらいとします。

1 生物多様性やその恵みに関する認識の『社会への浸透』

生物多様性を理解し、その保全の重要性を認識し、行動できるよう生物多様性を広く社会に浸透させます。

ふくおかの魅力が生物多様性の恵みに支えられていることを理解し、重要性を認識できる人や組織の形成を支援します。

2 人と自然の環境を改めて考えながら生物多様性の『保全』

海洋、島しょ、干潟、平野、丘陵、山地、河川などふくおかの多様な生物の生息環境を守るとともに、中心市街地や港湾地域などにおいては、再生・復元を行い、山、川、平野、海のつながりを確保します。

動物、水生生物、植物などふくおかの貴重な生き物を守り、豊かな生物相の回復を目指します。

3 生物多様性から享受される恵みの『持続可能な利用』

ふくおかの地理的特性を活かして生物多様性に配慮したまちづくりを推進します。

安心して暮らせるふくおかの都市基盤をつくります。

生物多様性の恵みを活かしてふくおかの魅力を増進します。

4 生物多様性に支えられる『文化』の継承と創造

生物多様性に育まれてきたふくおか固有の文化を継承します。

生物多様性の恵みを活かして新たなふくおかの文化を創造します。

5 より広域な視野をもちながら地域の生物多様性を支える多様な主体や地域との『連携』

ふくおかの生物多様性を支える多様な主体、多様な地域との協力関係を構築し、連携した取り組みを推進します。

ふくおかの生物多様性を支える多様な主体、多様な地域と連携していくための仕組みやルールを構築します。

主な取り組み

社会への浸透

生物多様性に関する教育・学習の推進

【生物多様性に関する教育・学習を推進します】

生物多様性の指導者やコーディネーターを育成するとともに人材バンク等の仕組みを構築
生物多様性について幅広い年齢に対応したプログラム・教材を作成

生物多様性の調査研究の推進

【生物多様性の調査研究を推進します】

生物多様性地図情報システム（GIS）を構築し、事業の立地選定や情報解析による
施策立案への活用及び情報発信
気象、生物等の自然環境データを解析し、生物多様性の研究を推進

保全・利用

野生生物の保護管理

【地域の貴重な生物の保全を推進します】

野生生物の保護及び絶滅を防ぐ仕組みを検討、構築

【自然環境の再生・回復を推進します】

今津干潟周辺のため池・水路の適切な水位管理による新たな鳥類の生息場の創造

【外来種による被害の未然防御を推進します】

外来種に関する現状把握、情報発信

博多湾の生物多様性の向上(豊かな恵みの復活)

【市街地の生態系のつながりの回復・保全を推進します】

藻場の保全再生

稚仔魚の生育・生息の場である藻場の拡大、生き物が生まれ育つ環境を保全創造

底質の改善

博多湾の底質の改善を進めるための浚渫土等を利用した水質浄化・生物の生息環境
創造

里地、里山、都市域の生態系の保全再生

【自然景勝地や里地里山の景観など地域らしい風景の保全を推進します】

多様な里山・里海環境

今津干潟での里海再生事業の拡充、他地域への適用の検討

【市街地の生態系のつながりの回復・保全を推進します】

市街地内の生物の生息場所

市民・NPO等活動団体と連携、共働による市街地内の生物生息環境を保全・回復

新たな生物生息環境の創造

【市街地の生態系のつながりの回復・保全を推進します】

野鳥公園の整備（アイランドシティ）

周辺の自然環境と一体となった空間としての整備

エコパークゾーンの整備

自然環境保全と共に市民憩いの場としての創造

環境の緩和・安定機能の維持増進

【水害や土砂災害などを抑制する機能の維持・向上を推進します】

森林の保全整備より水源涵養、土壌保全等の機能を増進

文化

地域文化の維持・継承

【身近な自然環境の体験・学習・景観資源としての積極的活用を推進します】

レクリエーション、観光、エコツアーを通して自然公園や里山・里海等利用を促進

【伝統文化や歴史資源等の保全、継承する人材の育成を推進します】

五穀豊穰を祝う祭り等地域固有の文化の世代を超えた継承

本戦略の目標を実現するためには、行政だけでなく、市民、NPO 等活動団体、事業者など、それぞれの各主体が共働して取り組むことが重要であり、それぞれの主体には、以下のような役割や取り組みが期待されます。

1 行政の役割

本市がこれまでに推進しているさまざまな取り組みを生物多様性の視点で体系化し、市民、NPO 等活動団体、事業者など多様な主体に提示する役割を担います。

本市が行うあらゆる施策、事業において、生物多様性の視点と具体的な対応策の導入を促進し、取り組みの先導役を担います。

市民、NPO 等活動団体、事業者などの各主体の取り組みを支援するとともに、各主体間の橋渡し役を担います。

これらを実現するために必要となる、各種情報の収集(モニタリング等含む)と、市民、NPO 等活動団体、事業者などへ情報発信の拠点となります。

2 市民の役割

生物多様性について知り・考えることが期待されます。

生物多様性を保全するために一人ひとりが取り組むことが期待されます。

生物多様性を保全するために地域の取り組みに参加することが期待されます。

3 NPO 等活動団体の役割

地域の生物多様性の保全のための活動のけん引役となることが期待されます。

市民の生物多様性への理解を広め裾野を広げる役割が期待されます。

多様な主体による生物多様性の保全のための活動と連携しそれを支える役割が期待されます。

4 事業者(協同組合や公益団体含む)の役割

事業活動と生物多様性との関わりを把握するよう努めることが期待されます。

生物多様性に配慮した事業活動を行うことなどにより、生物多様性に及ぼす影響の低減を図り、持続可能な利用に努めることが期待されます。

取組の推進体制等を整備するよう努めることが期待されます。

5 大学等研究機関の役割

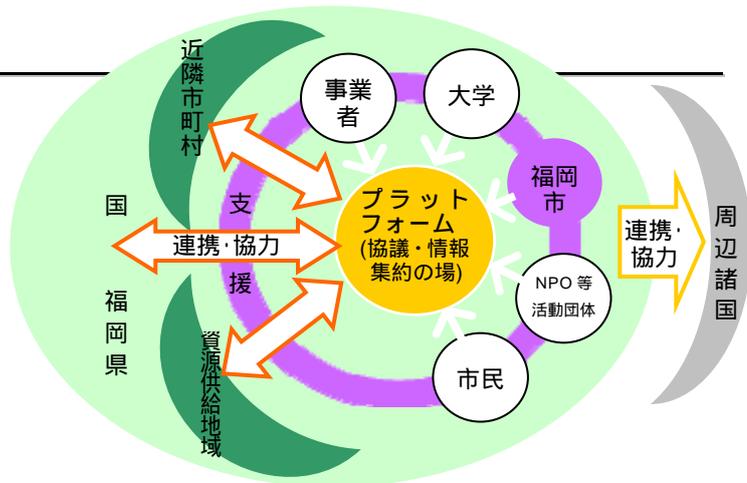
国内外のネットワークを活用した連携の促進や情報の蓄積・提供の機能が期待されます。

地域の多様な活動の支援や学校教育の現場と連携して学習支援の役割が期待されます。

生物多様性に関する大学カリキュラムの導入を通じた若者の育成や地域活動・地域産業などとのつながりの強化が期待されます。

1 多様な主体との連携

戦略を効果的に推進し、目標を達成していくためには、庁内の関係各局、周辺行政機関相互の連携のみならず、市民、NPO等活動団体、事業者などとの連携が必要です。

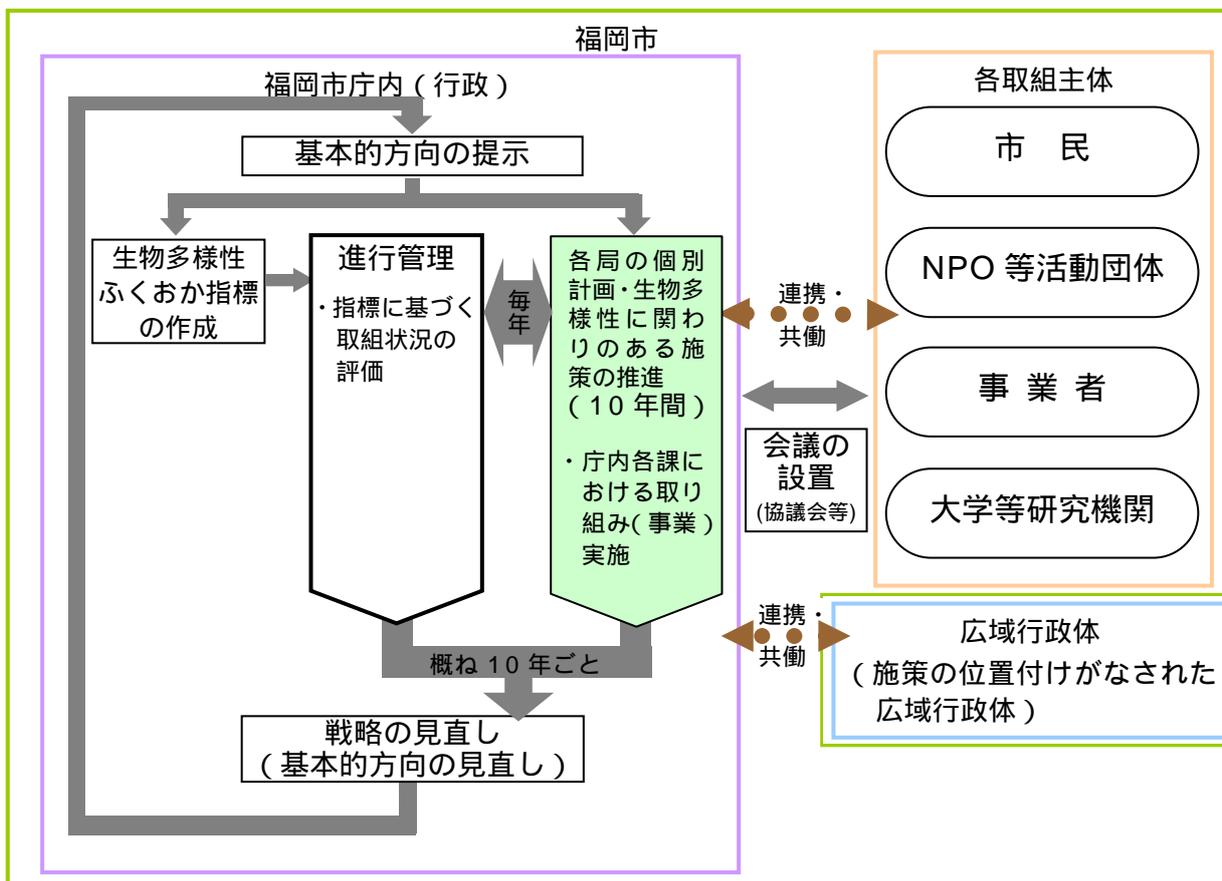


2 進行管理

本戦略の目標の達成には、個別に各施策の取り組みを推進していくこと以上に、その進捗のバランスや調和が重要になると考えています。

そのため、整理した各施策の進捗状況を踏まえ、「基本的方向」ごとの取組状況を評価し、新たに必要となる方向性などを検討して、次に取り組むべき施策を再整理し、戦略の目標の達成を目指していきます。

まず、初期段階として、当初の10年間は、本市の基本計画や各行政計画に生物多様性の考え方が導入されることを目標とし、全体としては、長期間にわたって取り組みのバランスを維持しながら生物多様性のポテンシャルを高めていくことを、本戦略の進行管理の考え方とします。



1 福岡市の特性

歴史の中で培われてきた福岡市の個性、生物多様性に支えられた福岡市の魅力について、整理しました。その一例を抜粋して例示します。

地理的特性

本市が位置する九州北部は、浅海が広がり、陸域から豊富に栄養塩類が供給される豊かな海に恵まれています。四季の変化があり、冬季には季節風が吹き付ける日が多いものの、温暖で湿潤な気候は豊富な降雨をもたらす。山から河川、海への水の循環は多くの生きものが存在する基盤を形成しています。

多くの河川が流れる福岡平野は、南は脊振山地、東は三郡山地に囲まれた半月型の沖積平野となっています。海拔 0m の沿岸部から高地まで標高差のある地形は、気候や植生の異なる多様な環境を形成し、豊かな自然の恵みをもたらしています。



食文化

本市は、北は玄界灘に臨み、南には広大な福岡平野をひかえ、海の幸・山の幸が豊富にあり、それらが陸路水路を通じ行き交い、新鮮な食材が毎日手に入る都市でした。古くから庶民、商人は町の中でも季節感をもった食の暮らしを営み、豊かな食文化を築いてきました。



シロウオ



あぶってかも



おきゅうと



サバのゴマ醤油

福岡市の魅力を支える生態系サービス(文化的サービス)

私たちは、祭り・伝統芸能などの文化的多様性、鎮守の森などの精神的・宗教的価値、自然とのふれあい活動などによる教育的価値、自然公園・名勝にみられるような審美的価値、天然記念物などの文化的遺産価値、公園利用などを通じたレクリエーションといったサービスを受けています。

本市は、市街地と自然環境が近接しているコンパクトな都市構造であり、優れた自然環境である海、山、そしてレジャー・レクリエーション施設へのアクセスが高く、自然環境に親しみやすい都市です。



海の中道



白砂青松の海岸(玄海国定公園)



室見川河口(潮干狩りの様子)

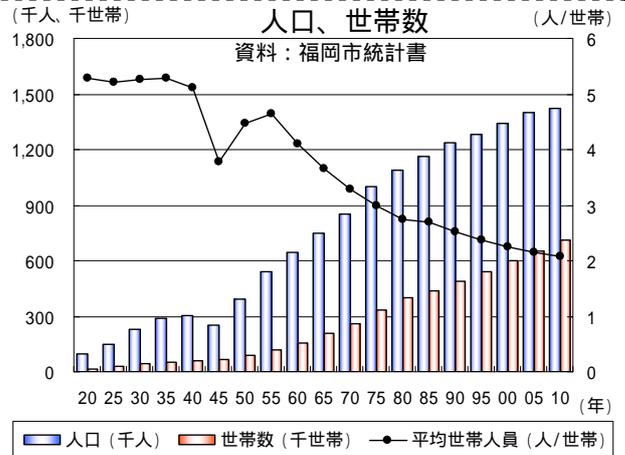
2 生物多様性とその利用、影響を与える要因の変遷と現状

(1) 生物多様性に影響を与える要因の変遷と現状

生物多様性に影響を与えていると考えられる間接的・直接的な要因について、整理しました。その一例を抜粋して例示します。

社会状況の変化

本市の人口は、戦後の高度経済成長期に急速に増大し、1975（昭和 50）年には100万人を突破しました。その後も成長を続け、2005（平成 17）年には、人口は140万人を突破しています。



暮らしの変化

本市の食糧流通拠点である福岡市中央卸売市場の取扱量でみると、福岡県内産品の野菜の取扱割合が、1960（昭和 35）年の約 7 割から 2005（平成 17）年の約 2 割に低下し、地元産品よりも他地域の生産品の割合が高くなってきています。

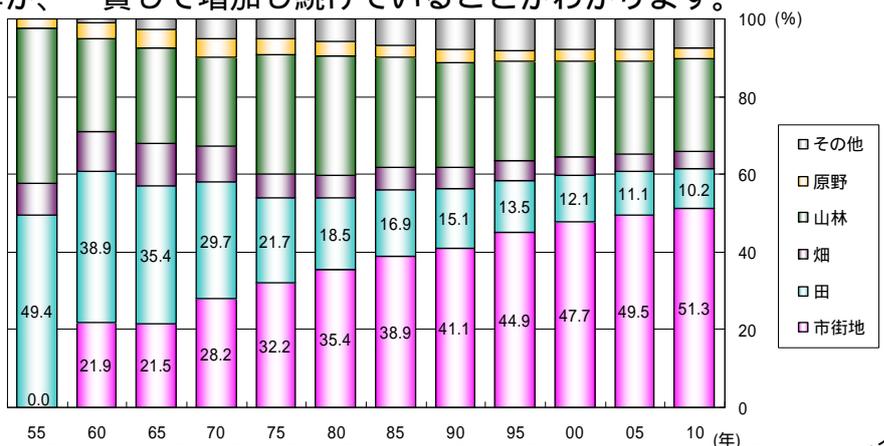
農産物の中央卸売市場取扱量（産地別、取扱量の多い順に 5 位まで）

	1960年			1975年			1990年			2005年			
	生産地	取扱量 (t)	取扱割合 (%)										
(野菜)	1位	福岡県	43,805	73.2%	福岡県	47,671	42.8%	福岡県	54,281	30.2%	福岡県	40,483	19.6%
	2位	熊本県	6,212	10.4%	熊本県	15,295	13.7%	長崎県	23,290	13.0%	北海道	27,474	13.3%
	3位	長崎県	2,700	4.5%	佐賀県	8,675	7.8%	熊本県	21,561	12.0%	熊本県	23,243	11.3%
	4位	佐賀県	1,851	3.1%	長崎県	8,132	7.3%	大分県	15,908	8.8%	長崎県	21,539	10.4%
	5位	大分県	1,418	2.4%	大分県	6,381	5.7%	北海道	14,983	8.3%	長野県	16,568	8.0%
(果物)	1位	福岡県	12,497	51.3%	福岡県	20,230	33.3%	フィリピン	20,957	23.5%	フィリピン	20,593	27.1%
	2位	長野県	2,971	5.0%	熊本県	8,805	7.9%	福岡県	17,040	9.5%	福岡県	16,220	21.3%
	3位	熊本県	2,618	4.4%	佐賀県	6,438	5.8%	アメリカ	9,794	5.4%	アメリカ	5,005	6.6%
	4位	青森県	2,101	3.5%	大分県	4,283	3.8%	熊本県	7,946	4.4%	熊本県	4,528	6.0%
	5位	佐賀県	1,441	2.4%	フィリピン	4,030	3.6%	青森県	5,353	3.0%	青森県	3,835	5.0%

環境の変化

地目別面積（有租地面積）の構成比の推移をみると、商業地区、工業地区、住宅地区からなる市街地の比率が、一貫して増加し続けていることがわかります。

土地利用面積（有租地面積）
構成比



備考：有租地面積は、固定資産概要調書から各年 1 月 1 日現在の免税点以上の地目別面積を算出したもの

資料：福岡市統計書、1945 年以前は福岡市勢要覧

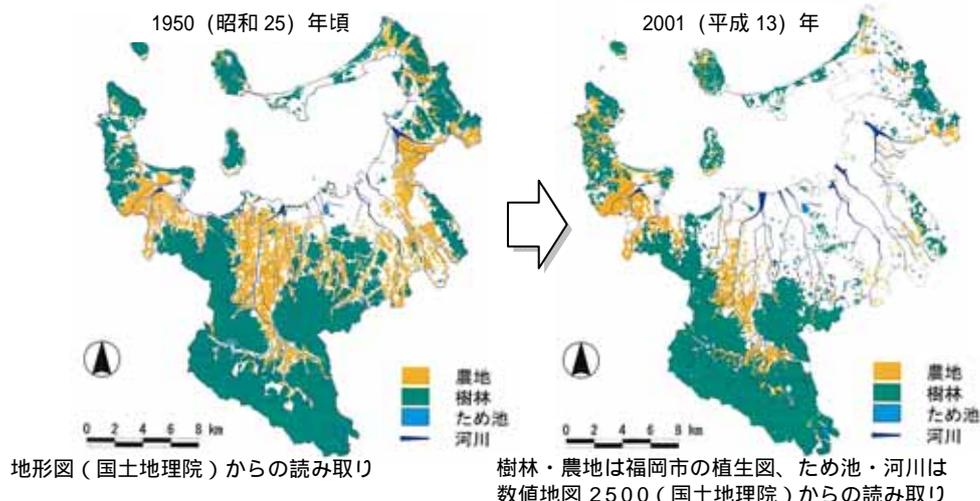
(2) 生物多様性の健全性の変遷と現状

生物多様性の健全性を評価する視点として、「生態系の多様性」、「種の多様性」、「種の危うさ」に着目し、指標となるデータの推移を基に、本市における生物多様性の健全性の変遷と現状を整理しました。その一例を抜粋して例示します。

生態系の多様性

1950（昭和25）年頃と2001（平成13）年を比較すると、樹林、農地、二次林の減少などにより、本市の陸域生態系の多様性は、量、質ともに低下しています。特に農地の減少が著しく、農地生態系の質が低下していると考えられます。

明治時代以降の埋め立てによる自然海岸の面積の減少、生活排水による博多湾の水質・底質の汚濁の進行など、沿岸域の生態系では多様性の質が著しく低下していると考えられます。



種の多様性

1970（昭和45）年頃と2001（平成13）年の生物生息空間モデルを比較すると、農地型が住宅型や都市型に、住宅地型が都市型に変化しており、農地型の生物生息空間が減少し、住宅型と都市型が拡大しているため、それにともない、種の多様性も低下しているものと考えられます。

種の危うさ

過去に記録はされていますが、近年生息が確認されていない、または、分布が特定されていない種として、キキョウ、ヒナモロコ、ウラギンスジヒョウモンなど計10種が挙げられます。

草地環境に生息するシルビアシジミなども近年確認されなくなっています。これらは、生育生息環境の消失が、主な減少要因であると考えられます。

市内で絶滅した可能性が高い動植物とその生育生息環境

分類群	種名	主な生育生息環境
植物	キキョウ	日当たりの良い山地や野原
	リンドウ	日当たりの良い山地や野原
魚類	ヒナモロコ	流れの緩やかな細流、用水路やこれに続く浅い池
昆虫類	ウラギンスジヒョウモン	明るい草原、堤防など
	ウラナミジャノメ	明るい疎林や路傍、草原
	クモガタヒョウモン	日当たりの良い草原や堤防
	ヒオドシチョウ	低地～低山地の樹林帯
	ミヤマチャパネセセリ	高地の草原や山間の路傍、湿原の周縁
甲殻類	シオマネキ	泥質干潟
貝類	ビョウブガイ	アマモが生えた内湾の海底

資料：福岡市環境配慮指針（改訂版）（2007年・福岡市）

(3) 生態系サービスに着目した変遷と現状

「基盤サービス」、「調整サービス」、「供給サービス」、「文化的サービス」について、指標となるデータの推移を基に、福岡市が享受している生態系サービスの変遷と現状を整理しました。その一例を抜粋して例示します。

基盤サービス(栄養塩類の循環)

博多湾には、陸域から COD (化学的酸素要求量) で 1 日あたり 20.5 トン、全窒素で 14.9 トン、全リンで 0.63 トンの有機物や栄養塩類が流入していますが、その 6~7 割に相当する量が東部海域に流入し、博多湾に滞留した後に湾外に流出します。

COD は湾内で内部生産のため流入負荷の約 2 倍に相当する量が湾外へ流出し、全窒素や全リンは、流入負荷と同程度の量が湾外に流出している状況です。



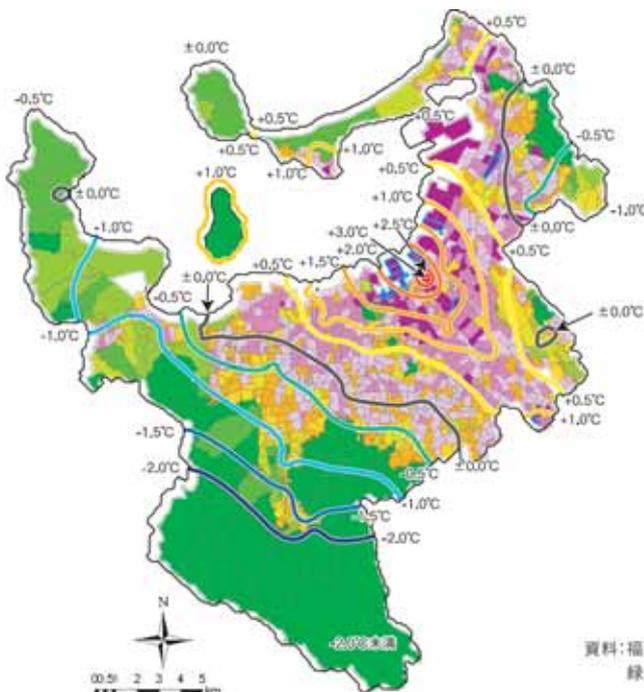
海域別 COD 流入負荷 (2002 年度)
出典：博多湾環境保全計画 (2008 年・福岡市環境局)

調整サービス(気候の調節)

海洋は、水とともに熱を運搬し、気候の急激な変化を緩和しています。日中の海域と陸域の温度差によって生じる海風は、冷涼な空気をもたらします。この調整サービスに関しては、大きな変化はないものと考えられます。

陸域では、緑地が気候の調節に大きな役割を果たしています。緑地は、蒸発散作用により地表面の高温化を防ぎ、周辺の空気を冷やす効果があるため、夏季の高温時にも緑被率の高い山間部や島しょ部では、気候が安定しています。

一方、市街化された都市の中心部では、緑被率の低い環境となっており、人工排熱の増大により、ヒートアイランド現象が発生しています。



ヒートアイランド現象発生時の等温線と緑被率の関係

出典：福岡市新・緑の基本計画 (2009 年・福岡市住宅都市局)

町丁目別平均緑被率

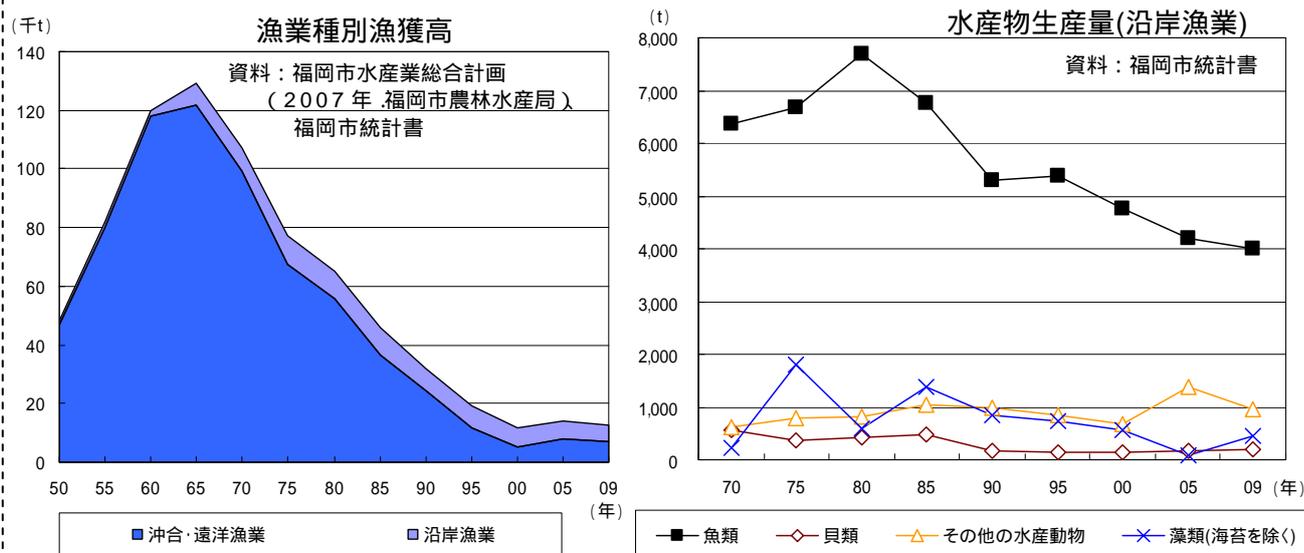


資料：福岡市ヒートアイランド現象調査報告書(H15)、
緑の基礎調査報告書(H16)から作成

供給サービス(漁業生産)

本市の漁業生産の状況をみると、沖合・遠洋漁業の生産量は、1965(昭和40)年をピークに急激に減少し、2000(平成12)年には、遠洋漁業の軸であった以西底曳網漁が廃業となっています。

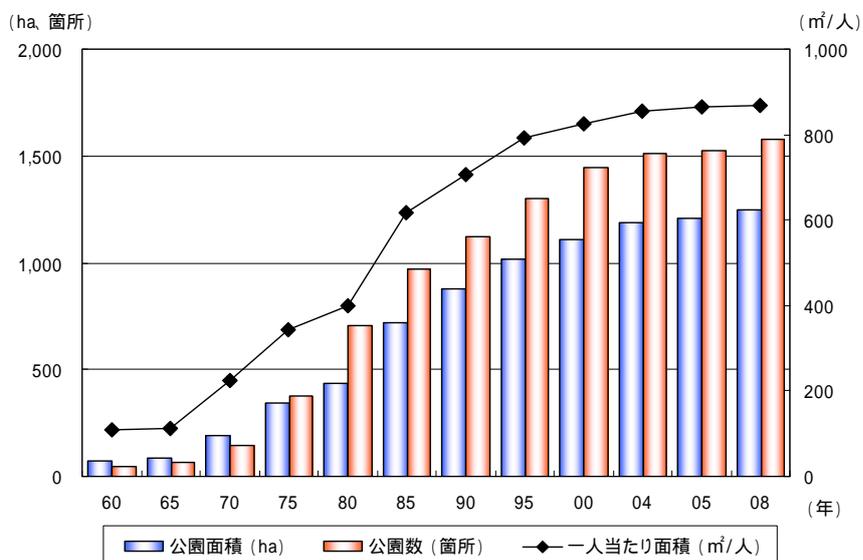
また、沿岸漁業の水産物生産量の特に魚類については、1983(昭和58)年に香椎地先及び百道の埋め立てにより、最奥部と姪浜～百道沿岸の共同漁業権が除外されたことで、1985(昭和60)年頃の沿岸漁業の生産量が大きく減少し、近年も若干の減少傾向にあります。



文化的サービス(レクリエーションとエコツーリズム)

本市では、田畑等の自然緑地は減少していますが、市街地の都市公園の整備は進められており、身近なレクリエーションの場の充実が図られています。

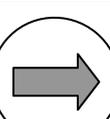
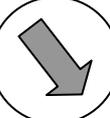
郊外には、国営海の中道海浜公園(1981(昭和56)年開設)や油山市民の森(1969(昭和44)年開設)などのレクリエーション、エコツーリズムを楽しむ場も充実してきています。



3 福岡市における生物多様性とその利用に関する評価

生物多様性に影響を与える要因と、福岡市における生物多様性の健全性、並びに生態系サービス（基盤サービス、調整サービス、供給サービス、文化的サービス）の関係性について整理し、それぞれについて、変化の方向と変化の状況・要因について分析しました。

これによると、「生物多様性の健全性」の変化の方向は全て減少傾向であり、「生態系サービス」についても、文化的サービスが概ね横ばいであることを除けば、全て減少傾向にあります。

	<p><u>生態系の健全性</u></p> <p>生態系の多様性：開発等による生息環境の減少・機能低下 種の多様性：生息環境の変化による種の減少・特定種の増加 種の危うさ：国境を越えた気候変動・環境汚染・外来種の侵入</p>	
<p>生物多様性の恵み（生態系サービス）</p>	<p><u>水の循環や豊かな土壌など存立の基盤（基盤サービス）</u></p> <p>土壌形成：都市化による森林、農地生態系の減少 水の循環：人工被覆面の増加による水源かん養機能の低下 一次生産：森林、農地生態系の保全を担う一次産業の衰退</p>	
	<p><u>食べ物、木材など暮らしの基盤（供給サービス）</u></p> <p>農作物：農業の衰退による農産物の供給力低下 淡水：水資源の他地域への依存など 漁獲：海外の水産物需要の増大による資源量の減少 木材：安価な輸入品への依存傾向などによる衰退</p>	
	<p><u>自然と共生してきた知恵と伝統、文化（文化的サービス）</u></p> <p>文化的多様性：新鮮でおいしい食べ物の豊富さ 文化的遺産的価値：自然環境の豊かさ、芸術・文化水準など レクリエーション：自然環境を活かした観光ニーズの高まりなど</p>	
	<p><u>山地災害、土壌流出の軽減など暮らしを守る（調整サービス）</u></p> <p>大気調整：都市化による森林、農地生態系の減少 水の浄化：人工被覆面の増加による水循環機能の低下 気候調整：基盤的な機能を周辺地域に頼る</p>	

4 福岡市の生物多様性を取り巻く国内外の現状

気候変動や食糧需給の増加、森林の消失など生物多様性を取り巻く外的な脅威がある一方で、市民や事業者などの環境保全意識の高まりや、環境保全に関する法制度の充実など、本市の生物多様性を支える要因もあります。

1. 環境に対する意識の変化

行政だけでなく、市民や事業者においても、環境保全意識が高まっています。

2. 世界規模の社会動向

気候変動や食糧需給の増加、森林の消失など、生物多様性を取り巻く状況は悪化しています。

3. 国際的な環境保全の取り組みの推進・支援

名古屋で開かれた COP10 では、「地方自治体と生物多様性に関する愛知・名古屋宣言」で提示されるなど、国際的な取り組みが進められています。

4. 日本国内の社会動向

わが国の里地里山環境の多くは、人口減少と資源利用の変化により、多様性が失われてきています。

5. 国による環境保全の取り組みの推進・支援

環境影響評価法などの法制度の充実や、環境情報の整備など、国による環境保全の取り組みが進められています。

6. 福岡市の広域的な位置づけ

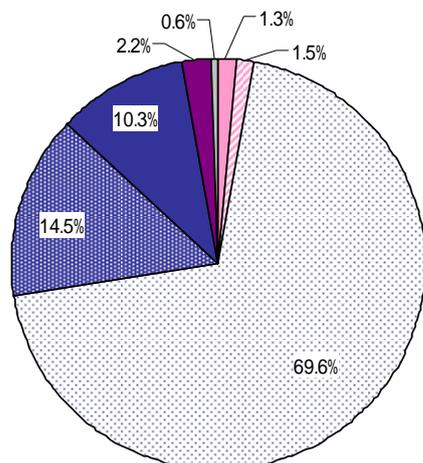
本市には多くの大学が立地しており、これらの大学では生物多様性に関するさまざまな取り組みが行われています。

福岡市民の環境に対する意識について

本市では、平成 23 年度に「生物多様性に関する市民アンケート」を実施しています。アンケート結果の一例を抜粋して例示します。

福岡市の生物多様性を保全していく方向性については、「人間生活が制約されない程度に多様な生きものが生息できる環境保全を進める」という考えの方が約 70%を占めています。

設問：現在の福岡市をより魅力ある都市とするため、私たちの生活と自然との共生のあり方として、あなたの考えに最も近いものを1つだけ選んでください。



- 人間生活を豊かで便利にすることが最優先で、多様な生物が生息できる環境は必要ない
- 人間生活の豊かさ確保のため、多様な生物が生息できる環境の損失はやむを得ない
- 人間生活が制約されない程度に、多様な生物が生息できる環境保全を進める
- 人間生活が制約されても、多様な生物が生息できる環境保全を優先する
- 人間生活を制約してでも、多様な生物が生息できる環境の保全を最優先する
- わからない
- 無回答

私たちの生活と自然との共生のあり方に関する市民意向
出典：生物多様性に関する市民アンケート

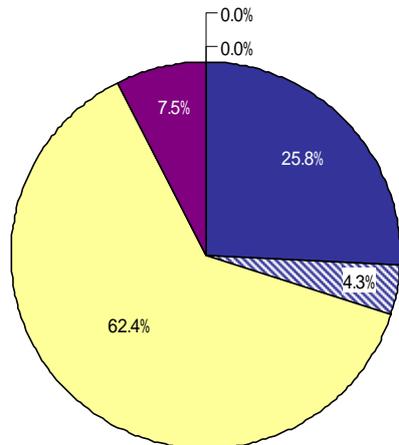
福岡市内の事業者の環境に対する意識について

本市では、平成 23 年度に「生物多様性に関する事業者アンケート」を実施しています。アンケート結果の一例を抜粋して例示します。

福岡市内に事業所を置く事業者等の生物多様性に対する意識をみると、本市が実施したアンケート調査では、約 26%の事業者が「生物多様性の保全が自社の企業活動と大いに関係があり重要視している」と回答されており、同様の調査を行っている「環境にやさしい企業行動調査」の約 17%と比べて高い数値になっています。

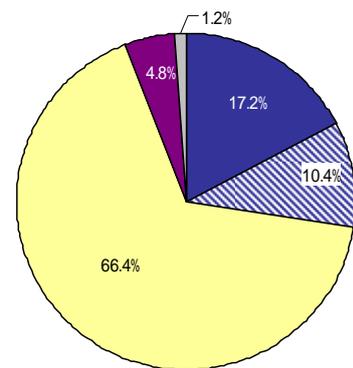
設問：生物多様性の保全への取り組みと企業活動のあり方について、貴組織の企業活動と生物多様性の保全への取り組みとの関連性として当てはまるものに 1 つ、 をつけてください

問5 企業活動と生物多様性の関連性 (N = 93)



- 自社の企業活動と大いに関連があり、重要視している
- ▨ 自社の企業活動との関係はあるが、それほど重要視していない
- 生物多様性は重要であるが、自社の企業活動との関連性は低いと考えている
- その他
- 無効回答
- 未記入

参考：環境にやさしい企業行動調査結果 (H21, 環境省)
問9-1 生物多様性の保全への取組と企業活動のあり方 (N = 3028)



出典：環境にやさしい企業行動調査結果
【概要版】(2010年・環境省)

生物多様性・生態系サービスに関する意識・理解度

出典：生物多様性に関する事業者アンケート